

〔研究ノート〕

イエロー・バード (ジョン・ロリン・リッジ)

― チェロキー・インディアン作家誕生の背景と作品 ―

西 村 頼 男

キーワード

Yellow Bird, Cherokee, Joaquin Murietta

目 次

I	チェロキー族と金の発見
II	涙の踏み分け道
III	ニュー・エチヨタ条約
IV	リッジーワティ一族
V	イエロー・バードの略伝
VI	カリフォルニアにおける金の発見
VII	『ホアキン・ムリエタ ― 名高きカリフォルニアの山賊 ― の生涯と冒険』 梗概
VIII	ホアキン伝説

I チェロキー族と金の発見

チェロキー・インディアンが白人と接触した頃の人口は約二二、〇〇〇で、領土は四万平方マイル以上あった。今日の南北カロライナ、ヴァージニア、ウエスト・ヴァージニア、ケンタツ

キー、テネシー、ジョージア、そして、アラバマの八州におよんでいた。しかしながら、一七二一年から土地の譲渡が進み、チェロキーの領土は一八一九年にはノースカロライナ、テネシー、ジョージア、アラバマの山岳地帯に限定されるようになった。

白人との接触以後、チェロキーの指導層には混血インディアンが多く、文明化は着実に進んでいた。具体的には製粉場や学校が建設され、耕作の行きとどいた畑がいたるところにできた。さらに、一八二〇年代の終わり頃までにはチェロキーのアルファベツトで印刷された新聞が発行されており、一八二七年には「チェロキー憲法」を制定するまでになっていた。チェロキーの改革派は、わずか八分の一しかインディアンの血が入っていないジョン・ロ<sup>〔1〕</sup>スを擁立して、文明化に反対する部族内の勢力を抑えた。しかしながら、ジョージア州議会は「チェロキー憲法」を問題とした。その理由はチェロキーが「他のいかなる州の権限も排除して、自らの領土に関する全面的な司法権を有する」政府を樹立しようとしたことにある<sup>〔2〕</sup>。白人の主張する文明化をチェロキーがここまで

達成していたときに、チェロキーにとって不幸なことに、二八年にジョージア州内で金が発見された。場所はアトランタの北に位置するダーロネガであり、これは合衆国最初のゴールドラッシュを引き起こした。

## Ⅱ 涙の踏み分け道

「涙の踏み分け道」<sup>トレイル・オフ・ティアーズ</sup>は文明化した五部族(チェロキー、チョクトー、チカソー、クリーク、セミノールの五部族)が合衆国政府によって合衆国南東部の先祖伝来の地から、今日のオクラホマ州に強制移住させられたことを指す。

最初に移住させられたのはチョクトー族であった。一八三一年十月、約四、〇〇〇人が歩いたり、幌馬車を使ったり、馬に乗ったりして先祖の地を出発した。その後、蒸気船を使い、最終的には陸路でオクラホマに向った。移住は冬季に、雪に被われた小道を辿るものであった。休憩所は不十分で、食料は不足した。彼らは五〇〇名から二、〇〇〇名の規模で移住したが、死者は数百人に達した。一家全員が、ある場合には、ある地域の全員が病氣、疲労、事故などのために、また、冬空に晒されたために亡くなった。「涙の踏み分け道」という名前が生まれたのはこのチョクトーの経験による。第二の大移住は三三年に、さらに、三三年にも行われた。

チョクトー族に続いたのはクリーク族であったが、チョクトー

の移住の場合とは異なった。三三年の条約は署名されたが、保守派は先祖の地を離れることに反対した、その結果、三六年から三七年にかけてクリーク戦争<sup>(3)</sup>が起きた。そこで、連邦政府はウィンフィールド・スコット將軍の指揮のもと、一四、五〇〇名以上のクリークを逮捕して、陸路オクラホマへ追い立てた。そのうち、二、五〇〇名は鎖に繋がれて移住した。正確な数字は不明だが、旅中、大勢の者が亡くなり、三、二〇〇名がオクラホマに到着後、病氣と住まいがないために亡くなった。

次にチカソー族が移住したが、彼らの被害はいちばん少なかった。その一因は人数が少なかったことによる。しかしながら、五〇〇名が天然痘のために亡くなった。

第四番目のチェロキー族がいちばん悲惨な目に会った。移住を受け入れた者は約二、〇〇〇名で、三五年から三八年の間に比較的被害も少なく移住した。しかしながら、一四、〇〇〇名は移住に反対したために、ジョージア州の民兵がチェロキー国に侵略して、穀物を略奪し、家屋を焼き、家族を離散させた。民兵を抑えて、移住を円滑に実行するために連邦軍が派遣された。連邦軍は残っているチェロキーを駆り集めて、収容所に入れたが、病氣が蔓延した。そのために多くの者が亡くなり、三八年にオクラホマに向って出発したとき病氣にかかっている者も多かった。結局、部族の四分の一が亡くなった。

セミノール族は役人に騙されて条約に署名した。それにもかかわらず、連邦政府が条約の履行を主張したために、第二次セミノ

ール戦争<sup>(4)</sup>が起きた。戦いは連邦軍が三五年にフロリダに入り、セミノールを移住させようとしたときに始まった。セミノール族最後の一人は五九年二月に鎖に繋がれてオクラホマへ送られた。

### III ニュー・エチヨタ条約

アンドルー・ジャクソン大統領は一八三〇年五月に「強制移住法」に署名した。ジャクソンはこれによってミシシッピ川の東岸に住んでいるインディアン諸部族を西部へ移住させるという、彼の方針を実行する手はずを整えた。連邦政府は次の十年間に脅迫と強要に満ちた雰囲気の中で取り交わされた条約によって南東部の諸部族を移住させた。ジョージア州からチェロキー族を追出したという欲望から生まれたのが「ニュー・エチヨタ条約」である。これは三五年に調印されたが、調印したのはチェロキー国の少数派だった。大多数は移住に反対して、強制移住の撤廃を求めて最高裁判所にジョージア州を訴えた。他方、ルイス・キャス陸軍大臣とジャクソン大統領はチェロキー族に対して我慢がでなくなかった。そこで、二人はともにジョン・シャーマー・ホーン牧師に移住を受け入れる少数派と調印することを認めた。

三五年十二月、メージャー・リッジ、その息子のジョン・リッジ、そして、親族のエリアス・ブーディノーとスタンド・ワティが率いる少数派はジョージア州ニュー・エチヨタで条約に調印した。その内容はミシシッピ川以東のチェロキー全領土を五〇〇万

ドルおよびオクラホマの広い領地と交換するというものである。連邦上院はチェロキー国の評議会および主席族長のジョン・ロスの抗議にもかかわらず、三六年五月に条約を批准した。

リッジたち移住賛成派は条約調印後、オクラホマへ向った。ジョン・ロスと部族の大多数の者は、条約は無効だと主張して、三八年四月、一五、六六五名の嘆願書を議会に提出して条約の撤回を求めた。しかしながら、同年五月、陸軍省はスコット將軍をジョージア州に派遣して移住に抵抗するチェロキーを駆り集めた。そして、チェロキーの「涙の踏み分け道」が始まった。

### IV リッジ・ワティ一族

#### メージャー・リッジ

メージャー・リッジ (一七七一?—一八三九) は一七七一年頃に、今日のテネシー州ポーク郡のハイワッセで生まれた。彼は成人になってから英語に直せば「リッジ (尾根)」という意味の姓をつけていた。一方、「メージャー」は、彼がクリーク戦争中にアンドルー・ジャクソン將軍 (後に大統領) に従って「メージャー (少佐)」という称号を得たのをそのまま用いたものである。

若い頃のリッジは獵師として、また、戦士として活躍した。一七九二年頃にスザンナ・ウィケット (または、チェロキーたちの間ではホセヤ) と結婚して、北ジョージア州のウースキャロガに住んだ。二人の間には五人の子供が生まれたが、二番目の子供

がジョン・リッジであり、これがイエロー・バードの父親になる。メージャー・リッジは家族を支えるために肥沃な川沿いの低地に桃とリンゴの果樹園をつくった。また、黒人の助けを受けて家畜を飼った。

一八一二年、合衆国がイギリスに対して第二次独立戦争を布告すると、リッジは合衆国を支持した。そして、チェロキーの戦士を率いて、イギリスを支持する「レッド・ステック」の一団と戦った。彼はクリーク戦争中、一貫してアメリカ側に味方した。軍功をあげた彼は一流の外交官となり、部族の代表としてワシントンを何度も訪問した。一八二七年には主だった族長たちが相次いで亡くなったために、彼はチェロキー国の臨時代表となった。しかしながら、変化の激しい時勢は教育のある指導者を求めていた。そのために、教育があり、ほとんど白人といえるジョン・ロスが主席族長となり、彼自身は三人の評議者の筆頭となることに同意した。

### エリアス・ブーディノー (バック・ワティ)

バック・ワティ (一八〇四?—一三九) は一八〇四年頃にウーワティ (Owatte) の息子として、今日のジョージア州北西部に位置したチェロキー国のウースキャロガに生まれた。彼は一八一一年にキリスト教のモラヴィア派<sup>5)</sup>の学校に入学した。彼は成績優秀だったのだ、ボストンにあるアメリカ海外伝導団が彼と彼の従兄弟のジョン・リッジ、それにもうひとりの若者をコネチカット州

のコンウォールにある学校で、勉強するようにと招いた。三人はコネチカットへの途路、アメリカ聖書協会を統轄している人物に会うためにニュージャージーに立ち寄った。バックはその人物に深く感銘してしまい、学校に入学するとき、「ブーディノー」という名前で登録した。ただし、名前の最後に「エ」をもう一字付けた。彼は二〇年にキリスト教に改宗後、進学することになっていたが健康が思わしくないためにチェロキー国に戻った。

故郷に戻った彼は文明化を強く推進して、二五年から二七年までチェロキー国評議会の書記を務め、合衆国の憲法を模範としたチェロキー国の憲法制定に尽力した。また、禁酒運動にも参加し、二六年には大都市への講演旅行に出た。その目的は二〇年代初期にセゴア<sup>6)</sup>によって発明されたチェロキー文字を活字にするのに必要な印刷機購入資金を集めるためであった。印刷機が完成すると、彼はチェロキー語と英語による「チェロキー・フェニックス」紙の編集長になった。しかしながら、チェロキー国が移住条約をめぐって分裂すると、編集長を辞任した。移住賛成派はニュー・エチヨタにある彼の家で条約に調印した。彼は三七年条約反対派に非難されて、西部へ逃れて、今日のオクラホマ州北東部、チェロキー国パーク・ヒルズに住み、三九年、そこで暗殺された。

### スタンド・ワティ

スタンド・ワティ (一八〇六—七二) は一八〇六年十二月二九日にチェロキー国ウースキャロガで生まれて、「デガタブ (彼は

立つ」という名をもらった。彼の父親は純血チェロキーのウーワティ(エシメント・ワン)(古き者)で、母親は混血でスザンナ・バック・チャリテイ・リースといった。兄にエリアス・ブーディノー(バック・ワティ)がおり、七人の弟妹がいた。彼はキリスト教を受け入れると、名前から「ウー(Oo)」を外して「ワティ」(Watie)とした。そしてデイヴィッド・ワティという名前で知られた。一八一五年、彼は兄バックとともにジョージア州スプリングプレースにあるキリスト教モラビア派の学校にやられた。彼はここでキリスト教に改宗した。そこでの教育が終了すると、彼は家族の農場の世話をみるために故郷に戻った。一方、兄バックの方は部族と将来の指導者としての教育を続けて受けた。故郷に戻った彼は三度結婚したが、子供がひとりも生まれなかった。四番目の女性(サラ・キャロライン・ベル)と結婚したのは一八四三年であった。彼はリッジ・ワティ・ブーディノー一派の一員として移住問題に巻き込まれた。三四年十一月再度、ジョージア州ラング・ウオーターで移住賛成派の会議が開催されて、五七名が嘆願書に署名したが、ワティはその内の一名であった。彼は三五年八月、「チェロキー・フェニックス」紙の編集者に指名された。彼は三カ月後、移住賛成派の代表団の一員としてワシントンへ向った。彼が不在の間に、ブーディノーとリッジ父子が推進する会議がニュー・エチヨタで開催された。そして、ニュー・エチヨタ条約が調印されたので、彼は帰国後、この条約に名前をつらねた。その後、三七年にオクラホマ・ミズリー境界近くに移住すると、そこ

で、雑貨店を経営した。

一方、移住反対派の移住賛成派に対する憤慨は激しくなり、三九年六月にジョン・ロスを支持する者はグラント川近くのタクトカーに集まった。そして、ワティ、ブーディノー、メージャー・リッジ、そして、ジョン・リッジを死罪にすることに決めた。メージャー・リッジ、ジョン・リッジ、ブーディノーは暗殺されたが、ワティはかろうじて逃れた。その後、彼は一族の指導者になったが、チェロキー内の、移住賛成派に対する憎悪は南北戦争勃発まで続き、彼の弟(トマス)は四五年に暗殺された。南北戦争に際しては、彼は「チェロキー騎馬ライフル隊」を編成して、南部を支持した。ジョン・ロスはワティの圧力でしぶしぶ南部を支持した。六二年八月、彼はチェロキー南軍の主席族長となった。また、南北戦争中、彼は准将に昇進し、さらに、南軍の中で将軍になった唯一のインディアンであった。彼の得意とするのはゲリラ戦であった。終戦に際しては、降伏した最後の将軍であり、それは六五年六月二三日であった(戦争は四月九日に終わっていた)。戦後は六六年のチェロキー再建条約交渉では一員として活躍した。しかしながら、六六年、ジョン・ロスの死後は政治から退き、ブーディノーの息子(エリアス・コーネリアス・ブーディノー)とともに「ブーディノー・アンド・ワティ・タバコ会社」の設立に尽力した。ワティとジョン・ロスの対立の影響は今日にまで残る。

## V イエロー・バードの略伝

イエロー・バード(ジョン・ロリン・リッジ)(一八二七―六七)はチェロキー国(現在のジョージア州)に生まれた。父親のジョン・リッジは卓越した政治家であり、演説家でもあった。母親は白人で、コネチカット出身でサラ・バード・ノースラップといった。したがって、彼は混血だった。充分に教育を受けた両親は子供たちにも充分な教育を受けさせた。連邦政府の移住政策を知った彼の祖父と父親は最初、手入れの行きとどいた農地と農園を手放してインディアン・テリトリー<sup>(7)</sup>へ移住することに反対した。しかしながら、二人はジャクソン大統領の政策に抵抗するとは無理だと判断して、移住を決断した。そして、ニュー・エチヨタ条約に一八三五年に調印した。この条約は部族を二分することになり、リッジ一家は一八三七年に今日のミズーリ州に移住した。一方、連邦政府は一八三八年から翌年にかけて軍隊を使ってチェロキー族を強制移住させた。しかしながら、部族の大部分は条約の調印に反対していた。そのために、ニュー・エチヨタ条約に署名した祖父も父親も彼の眼前で、条約に反対したチェロキーたちによって暗殺された。エアース・ブーデイノも同じ日に暗殺された。そこで母親は一家をアーカンソー州ワイエテヴィルに移住させた。彼はそこで優れた教育を受けて、その後、マサチューセッツに行き、グレート・バリグトン・アカデミーで学んだ。

その後、再度、アーカンソーで、四〇年代後半に法律を学び、詩や記事を地方紙に発表し始めた。一八四七年、エリザベス・ウィルソンとの結婚後、農業や酪農の仕事に従事した。場所はミズーリ州サウスウエスト市からチェロキー国に入ったハニー・クリークでだった。この頃、彼の念頭にあったのはリッジ家の再興だった。しかしながら、四九年に馬のことでチェロキーのひとりの若者と口論となり、彼はその若者を殺害してしまった。彼はニュー・エチヨタ条約の調印をめぐるチェロキー内の対立のために、公正な裁判が受けられないと判断して、カリフォルニアに向う幌馬車に乗ることにした。五〇年に、カリフォルニアに着いた彼は金鉱探しもしたが、これは苛酷であり、利益の少ない仕事であるために断念した。そして、さまざまな職業についた後、彼は文学活動を再開した。一八五三年にはカリフォルニア州ユバ郡で郡役所の仕事をしていたが、彼はこの仕事に満足せずにニューオリンズで出版されている新聞に記事を送っていた。それは鉱山訪問記であり、一回につき八ドルをもらっていた。また、五四年には「ファインランド・C・ユーア」によって創刊された「ザ・パイオニア」という雑誌に詩や小品を定期的に寄稿して、ゴルド・ラッシュに沸く町の訪問記事を書いた。南北戦争が勃発するとチェロキーの独立を連邦政府(北軍)に認めてもらおうと努力したが、不成功に終わった。南北戦争に関して述べれば、彼はリンカーンを激しく批判し、奴隷制廃止には反対であった。南部側の「州権」政治に賛成して、南北戦争中、彼は民主党の活動家として、また、

資金集めをする係りとして北部カリフォルニアでは有名であった。波乱に富んだ彼の終焉の地はカリフォルニア州グラス・バードだった。イエロー・バードという名前はチェロキー語による名前を英語流に意訳したものである。<sup>(8)</sup> 作品としては『ホアキン・ムリエタ——名高きカリフォルニアの山賊——の生涯と冒険』<sup>(9)</sup> (一八五四年)と詩集(死後出版、一八六八年)があり、この詩集には五十一篇が収められている。これは彼の妻が編集したものである。その詩の大部分は二十歳になる前に書かれたものであり、二三歳になるまでの彼のことが記されている。二篇だけがインディアンものであり、詩の雰囲気は全体としてセンチメンタルであると思われる。<sup>(10)</sup>

## VI カリフォルニアにおける金の発見

ここでイエロー・バードの作品の舞台となっているカリフォルニアにおけるゴールド・ラッシュの概観がある書物によって紹介する。<sup>(11)</sup>

金が発見されたのはサクラメントから東へ六五キロメートルの地点にあるコロマという地であった。時は一八四八年一月二四日であり、金が偶然見つかったのはアメリカ川の放水路だった。ゴールド・ラッシュの始まる前のカリフォルニアの人口は約一四、〇〇〇で、そのうち、約七、五〇〇人がメキシコ系カリフォ

ルニア人で、残りは種々雑多な人種だった。

速い通信手段のない当時において、金の発見を東部に知らせたのは三月に発行された新聞だった。その新聞が船便でアトランタに送られると、四月には興奮の渦が湧き、五月には過熱した。その証拠に現地では物価が急に高騰した。職人の日給が二五セントとされる時代に、工具は高騰して、つるはし一本が五〇―六〇ドルとなった。

この年人々は金を採取するのに忙しかったので、犯罪はほとんどなかったという。金はこの年にほとんど取り尽くされたが、翌四九年になると発見の知らせは全世界に広まり、人々があらゆるところからやって来た。その三分の二はアメリカ人だったが、残りの三分の一はメキシコ、チリ、ペルー、イギリス、ドイツ、フランス、中国などからきていた。日本は鎖国のために、日本人は皆無だった。ロシア人も皆無だった。四九年だけでも、やってきた男たちの数は八、〇〇〇以上とされる。最初にやってきた外国人はチリ、ペルー、メキシコの間であり、四八年秋から四九年春までに合計五、〇〇〇人のチリ人とペルー人が来たが、そのために、アメリカ人たちは鉱山採掘権をアメリカ人に限定するよう動き始めた。チリとペルーの間よりも数の多いのはメキシコ人だった。メキシコ人はアリゾナに近いメキシコのソノラ郡から多数やってきたが、彼らの採掘場所はカリフォルニアの南部よりの鉱山に集中した。メキシコ人は四八年後半にやってき始めて、五〇年にはピークに達したが、五四年以後は途絶えた。その理由

はメキシコ人に対するアメリカ人の敵対的態度にある。ヨーロッパ人はラテン・アメリカ人よりも一年以上遅れてやってきた。中国人は五二年には一挙に五、〇〇〇人になった。そして、中国人街が形成されると、白人たちから黄禍論がでてきた。五〇年の春、カリフォルニア議会は非アメリカ人鉱夫には毎月二〇年ドルの税金を課すというきわめて排他的な法律を制定した。すなわち、「外国人鉱夫の租税に関する法」である。これは合衆国の市民かそれに近い者でないと金鉱採しに従事できないことを目的とした法律である。外国人が金鉱採しを望むのであれば、まず、一カ月間有効の許可証を購入しなければならない。さらに、その許可証は新しく料金を払って更新する必要がある。もし外国人の鉱夫が更新を拒否した場合、あるいは、怠った場合は当人を追放できるというものである。保安官、徴税官は知事が指名し、徴税官の人件費は許可証発行によって得られる資金で賄うものとした。そのため、その年のうちにチリやペルーの者が大多数、鉱山を後にした。しかしながら、メキシコ系の人間が数千人残った。

四八年から六四年の間に五〇〇もの町や村が誕生したという。中心地コロマにはホテルと木造のビルが約三〇〇建ち、飲み屋、ギャンブル場、売春宿などが繁盛した。四九年には決闘、ギャンブル、いんちきが横行して、五二年までには多くの者がこの町を去った。ゴールド・ラッシュの結末はゴースト・タウンである。また、死者には、二〇歳から二二歳までに死んだ若者が多いという。取れた金は一人、平均一日一オンス(二一・三五グラム)だが、

これは四八年のことである。取れた金はほとんどが砂金である。採掘方法が手作業から機械を使う方法に変わると、巨額の資金が必要となり、採掘は個人の手から離れた。

## VII 『ホアキン・ムリエタ―名高きカリフォルニアの山賊―の生涯と冒険』梗概

主人公ホアキン・ムリエタはメキシコのソノラ郡で生まれたメキシコ人である。彼は立派な両親に育てられた、性格温厚な若者である。横領や革命が頻発するメキシコに留まることに嫌気がさして、アメリカ人の中で自分の運を試すことにする。そのわけは、彼が故郷でアメリカ人に対して好印象を抱いたためである。十八歳でカリフォルニアのスタニスラウで金鉱採しに従事し、またたく間に金持ちになる。彼の周辺には彼を頼りにする者が集まる。

カリフォルニアには一攫千金を夢見るアメリカ人が押しかけており、無法者が大勢いる。彼らはアメリカ人という名前を戴いているが、その名前に相応しい荣誉と威厳を備えていない。そのうえ、彼ら是对メキシコ戦争で勝利を取めた直後だから、メキシコ人を総て軽蔑する。

あるとき、彼らはホアキンの家に押し入り、彼を縛り上げて、彼の眼前で彼の女に暴行を加える。事件後、彼は北の地に移住して、山間の地で小さな農場を営む。しかしながら、彼はここでも「いまいましいメキシコ人の闖入者め!」(十ページ)と追い出

される。次に彼は金鉱探しに従事するためにカラベラス郡に入る。しかしながら、以前のようには成功しない。そのために、彼はモンテという賭博ゲームを始める。彼はこのゲームで金儲けをして、前途は明るいかと見える。しかしながら、異母（異父）兄弟が貸してくれた馬に乗っているとき、その馬が盗まれた馬であるとアメリカ人の証言で判明する。すると暴徒と化したアメリカ人は彼の説明には耳を傾けずに、窃盗の罪を彼にきせて鞭打つ。さらに、暴徒は彼の異母（異父）兄弟の家に押しかけて、裁判にもかけずその兄弟を絞首刑に処してしまふ。ホアキンはこのときを期して、十九歳で復讐の鬼となり、以後無法者、山賊の長となる。彼の率いる一団は牧場を襲撃するが、この山賊には掟がある。すなわち、自分たちに宿を貸したり、何らかの援助をくれた場合は決してその牧場の人間に危害を加えないという掟である。

一八五一年、ホアキンの一団はカリフォルニアの諸所で略奪を繰り返すが、彼の身元は当局には未だ知られていない。犯行はホアキンの部下の犯行だと誤解されている。一団はその後、移動してシャスタ山の西に滞在する。そこでインディアンたちを誘い入れて馬泥棒を行う。翌年、五二年、一団は馬とともに山を下りて放牧に適しているアロヨ・カントーヴァに本拠地をおく。ホアキンは一、五〇〇—一、〇〇〇頭の馬やラバを盗むことを計画している。カラベラス郡マカレーミ・ヒルに出たホアキンは知り合いのメキシコ人たちの中で居を構える。

この頃、ハリー・ラブ警部はこの一団を追跡するために組織を

つくる。ラブは対メキシコ戦争で活躍した人物である。ラブは密偵を使つて一団の居場所を確認しており、後一步でホアキンたちを捕まえるところである。しかしながら、逃げきったホアキンたちはテジョン・インディアンの地に入り込む。これ以上追跡されないかと安心した一団は武器を外して寛ぐ。すると、テジョン・インディアンのサバトラ族長の部下に捕まって、木に縛りつけられる（三七—九）。その後、族長はホアキンたちを解放する。

八月下旬、ホアキンはオルタネスの小さな村で旧知のジョオ・レークと出会う。そこで、ホアキンは「俺はこの地方では知られていない。お前が俺を見たと言わないでくれたら、誰にも知られない。もし話したら、俺は殺す」（五〇ページ）と告げる。しかしながら、レークは市民の義務だと思つてホアキンを見た人々に喋つてしまふ。そのために、レークは殺害される。その後、ホアキンは変装して何度も町に入つて、自分にかけられた懸賞金の五、〇〇〇ドルを一〇、〇〇〇ドルに書きかえたりする。一団全員が久しぶりに集まると、馬は一、〇〇〇頭になつており、ホアキンは二、〇〇〇人を支配する長となっている。彼の目的はメキシコのためにアメリカ人に復讐することである。五〇、〇〇〇ドルと馬一、〇〇〇頭をソノラへ送る。ホアキンは自分の女の言葉で「アーカンソーからきたアメリカ人を殺害しない。しかしながら、アメリカ人に対する憤慨は消えていない。彼は「ホアキンだ！できるならば殺してみろ」と挑戦的な態度をとるために、懸賞金は一五、〇〇〇—二〇、〇〇〇ドルに上がる。

部下が若い男女のことに干渉したことを叱り、「俺は罪のない女たちを苦しめるよりもっと高い目的があるのだ」と言う(一〇六ページ)。そして、その若い女(ロザリン)を母親のところへ戻す。すると、ロザリンの相手の男はホアキンを賞賛する。二人は約束を守って、ホアキンのことを誰にも語らない。追跡する一団はメキシコ人を捕まえて、ホアキンの行き先を知る。一団の長(チャールズ・エラス)は南部出身で、この地に住んでいるチェロキーの協力を得る。最後にホアキンは射殺されるが、部下のひとりヴァレンスエラは生き延びる。それによって、ホアキンの意志は受け継がれる。

## VIII ホアキン伝説

一八五二年冬から翌年の春にかけて、おそらく鉱山から追い払われた大勢のメキシコ人が自分たちに金鉱探しをすることを禁止した者に復讐することにした。彼らは徒党を組み、山賊となり、家畜を解き放ち、馬を盗み、酒場や商店を略奪し、独り旅の者を襲い、財布を奪った。山賊はいくつもあり、大きな集団となったものもあった。新聞は事件を取り上げて、当局に対して何らかの措置を講じることを求めた。

これらの山賊に関して詳しいことは分らないが、山賊の頭はどの集団も「ホアキン」と呼ばれた。そして、少なくとも五人のホアキンがいた。

五三年春、カリフォルニア州の立法府が動きだした。生きていても、死んでいても、ホアキンを捕まえた者には五〇〇ドルの懸賞金を与えると発表した。しかしながら、これには問題があった。すなわち、誰もホアキンの顔を知らないのだから、本人かどうか確認する方法がない。また、懸賞金を獲得するために、待ち伏せしてたまたま捕まえたメキシコ人をホアキンだと言う者が現れるだろうという反対意見があった。

その結果、懸賞金は取り下げられた。次に立法府はある法律を成立させてテキサス州出身のハリー・ラブという男に、騎馬パトロール隊を編成させた。隊員は二〇名以下として、任務の期間は三か月間とした。法律の成立は五月十一日だった。さらに、ピグラー知事は私費で一、〇〇〇ドルの懸賞金を払うと言った。パトロール隊は二か月の間、何の成果もあげなかった。七月二五日、パトロール隊はメキシコ人の一団と出会い、銃撃戦となった。そして、自分がボスだと名乗ったメキシコ人は射殺された。もうひとりのマヌエル・ガルシア(「三本指のジャック」)は名高い盗賊であり、当局が探していた男である。ボスの頭部は切断されてアルコールに漬けられた。ガルシアの切断された手も同様にされた。数日後、事件が新聞に掲載されたとき、「ホアキン」という名前だけで、苗字は記されていないかった。どのホアキンかは不明のままだった。「ムリエタの頭部」といわれるものが以後何年もいくつもの博物館で展示された。

作者イエロー・バードはこの作品を発表する前年(一八五三年)にカリフォルニア州の新しい町メアリズヴィルからエリアス・ブーディノーに宛てて次のような手紙を送った。

「僕がカリフォルニアで今までどうであつたかは他の筋からよく知っていることと思う。不運の連続だつた。僕が、あるいは、父が所有していたどの奴隷よりもよく働いた。それも総じて無駄だつた。鉱山も試した、交易も試した。何でも試したが、無駄だつた……今はカリフォルニア州ユバ郡で月額一三五ドルで書記官代理、経理係、そして記録係<sup>(12)</sup>だ。」

彼はこの手紙の中で、土地を入手したから、資金を得てそれを開拓して、成功したらチェロキー国に戻り、祖父と父親を暗殺した者に復讐したいとも述べている。しかしながら、彼の願望は実現せず、彼の人生はジャーナリズムとの結びつきを強めつつあつた。

著者イエロー・バードがこの作品の着想を得た可能性のあるのは雑誌『パイオニア』に連載されていた「シャリイー・レタース(シャリイー便り)」という話である。バードがこの雑誌の出版社にしばしば出入りしていたこともある。このバードの作品はサンフランシスコでは注目されなかった。しかしながら、その後、ホアキン伝説は変更を加えられながら、スペイン、フランス、チリ、メキシコなどへ伝わる。上演もされた。一九五三年にはメキシコ市の出版社が変種談を出版した。こうしてスペイン語圏、あるいは、南米でもホアキン伝説は確立した観がある。

しかしながら、イエロー・バードの人生は彼が作品中で言及したシェイクスピアのようにはならなかった。少なくとも、「伝説」ではシェイクスピアはイエロー・バードとは異なり、財をなしたとされる。第一節から第四節までにおいて紹介したように、彼を取り巻く情況(チェロキーと白人の関係や部族内の対立など)は彼個人の能力で解決できるものではなかった。彼はカリフォルニアで一旗上げようとしてこの作品を執筆したと思われるが、発行部数が多かったとは思えない。なぜならば、この作品の初版は一九五五年(すなわち、このテキスト版の出版年)時点においてわずか一部しか発見されていないからである。それにもかかわらず、ホアキン伝説はでき上がり、アメリカ版ロビン・フッドともなった。

## 注

- (1) 一七九〇—一八六六。チェロキーの指導者。ジョージア州のルツクアウト山近くに生まれた。父親はスコットランド人のダニエル・ロスで、母親はスコットランド人とチェロキーの混血であつた。ロスは若い頃、「リトル・ジョン」と呼ばれた。彼はチェロキーたちとともに育ったが、教育は白人の家庭教師から受けた。その後、テネシーの学校へ行つた。チェロキーの血は八分の一ほどだったが、彼はいつも自分をチェロキーと見なしており、一八一三年に純血チェロキーのエリザベス・ブラウン・ヘンリーと結婚した。彼の政治活動は一八〇九年に始まり、十一年にはチェロキー評議会の常設委員会の一員であつた。アンドルー・ジャクソン將軍(後に大統領)が指揮する「レッドステック」との戦闘(ホスシュー・

バンドでのクリーク戦争)も経験しており、彼はこの戦闘の勝利に大いに貢献した。二〇年、チェロキーは共和制を敷いた。チェロキー族の中における教育とキリスト教の布教を擁護したロスは、チェロキーは憲法が成立すれば連邦内でひとつの州となるかもしれないと期待した。二六年、ニュー・エチョタがチェロキーの首都となると彼はそこへ移住して、二七年、彼はチェロキー憲法制定会議の長となった。彼は二八年から三九年までこの憲法のもとで主席族長となり、連邦およびジョージア州によるチェロキー領土への侵入に反対した。ジョージア州が二八年から三一年にかけてチェロキーの権利を奪ったとき、連邦最高裁判所へ提訴した。最高裁判所はチェロキーを支持したが、ジャクソン大統領はその判決を無視した。強制移住後、ロスはインディアン・テリトリーで、先に移住していた西部チェロキーたちの憲法制定に尽力した。移住に賛成した一派が暗殺されたことに因して、彼が関与したという証拠はない。南北戦争はチェロキーをさらに分裂させることになった。南部支持のチェロキーが多かったが、ロスは中立を主張した。戦後、彼はチェロキーのために連邦政府と交渉のためにワシントンを訪問中に亡くなった。

- (2) William T. Hagan. *American Indians* (Third edition) Chicago: The University of Chicago Press (1992), p.100.

- (3) 一八一三年から一四年にかけて行われたクリーク族の内戦。またの名をレッド・ステック戦争という。クリーク族(ムスコギー語族の中で最大の部族)は上部クリークと下部クリークに分かれていたが、上部クリークは伝統主義者で、自分たちの文化を守るためにアメリカ人と戦うつもりであった。他方、下部クリークは白人の文明化政策を受け入れ、連邦政府のインディアン担当官に協力的であった。指導者テカムシ(一七六八―一八一三)は上部クリークの間で支持者が多かった。彼らは戦場へ「レッド・ステック(赤い棒)」をもってゆき、アメリカ人の撃退をはかった。した

がって、「レッド・ステック」はそのようなクリークを意味する。

- (4) 第一次セミノール戦争(一八一七―一八年)では、アンドルー・ジャクソンは北部フロリダを攻撃して、セミノールの村や農場を破壊した。彼の目標はジョージアとフロリダ境界の、肥沃な地からセミノールを追い出し、スペインにフロリダを合衆国へ譲渡させることであつた。第二次セミノール戦争(一八三五―四二)は「強制移住法」の成立を受けて、連邦軍がセミノールを西部へ移住させようとしたために起きた。フロリダに五、〇〇〇から一〇、〇〇〇の兵力が派遣された。指導者のオセオラ(一八〇四?―一三八)は白旗に騙されて講和の席についたが、捕まり、投獄されて、三七年に獄死した。彼の後を引き継いだのはビリー・ボウレッグズで、彼はワニが多数棲息する、大湿地帯のエバーグレイズ地域に逃げ込んで、本格的なゲリラ戦を展開した。すなわち、昼間は隠れており、夜間に攻撃した。この第二次セミノール戦争には約五、〇〇〇万ドルがつき込まれたが、ベトナム戦争前では最も戦費がかかり、成果の最も少ない戦争であつた。

- (5) 十五世紀中頃、ポヘミアで結成された新教徒の一派。アメリカにはペンシルヴェニアに一七四〇年に、ノースカロライナに一七五三年に移住した。

- (6) 一七七〇?―一八四三。チェロキー語による音節文字表を考案した。

- (7) インディアン・テリトリーは政治的に厳密な意味で一度も準州ではなかつた。すなわち、準州を治める政府もなく、連邦政府が指名する知事もいなかった。インディアン・テリトリーとはインディアンが住んでおり、連邦のいかなる州にも所属しなかつた。そのため、地理的な境界は曖昧で、時代によって変わった。合衆国において州に昇格する前には「準州」と呼ばれる段階がある。しかしながら、「インディアン・テリトリー」はそのような意味では使われていない。表記上も大文字のTで始まらずに、小文字で始まるのが普通であつた。今日のオクラホマ州が「インディアン・

テリトリリー」になるのは時代が進んでからである。

- (8) Chees-quat-law-ny
- (9) John Rollin Ridge (Yellow Bird). *The Life and Adventures of Joaquin Murieta, the Celebrated California Bandit*. Norman: The University of Oklahoma Press (1955). 以下、ページ数だけを括弧内に記す。
- (10) Paula Gunn Allen(ed.). *Studies in American Indian Literature: Critical Essays and Course Designs*. New York: MLA, 1988, p.153.
- (11) 岡本孝司『ゴールズ・ラッシュ物語——汗と孤独の遺跡』文芸社、二〇〇〇年。
- (12) Introduction to *The Life and Adventures of Joaquin Murieta*, p.xviii.

(二〇〇四年十二月十四日受付)